キリスト教保育

2025年7月1日発行（毎月1回1日発行）第676号

年主題　ともに

論説
子どもを理解すること（2）
榎沢良彦

小論
子どもを亡した家族への支援と理解（2）
吉田　静

2025 JULY. 7

わたしは、あなたの指のわざなる天を見、あなたが設けられた月と星を見て思います。人は何者なので、これをみ心にとめられるのですが、人の子は何者なので、これを顧みられるのですか。ただ少しく人を神より低く造って、栄えと誉とをこうむらせ、これにみ手のわざを治めさせ、よろずの物をその足の下にはかれました。　聖書口語訳聖書・詩篇8篇3～6

詩人は人間を言い現わすのに二つの言葉を用いている。「人」と訳されているアダムと「人の子」と訳されているエノシュの二つである。

アダムーそれは神がご自分の形にかたどって、土の塵で造り、命の息を吹き入れられ生きた者となった最初の人である。アダムはエデンの園に置かれ、ふさわしい助け手であるエバを与えられた。しかし、やがて神の恵みを忘れ、その戒めに背いて、園を追われた。アダムは恥じることを知り、恐れることを知り、苦しむことを知った。だが、まだ本当に自分の弱さを自覚してはいなかったように思う。

アダムとエバの間にカインとアベルの兄弟が生まれた。本来ならば、この二人の兄弟によって、アダムに初まる人間の歴史は受け継がれていくべきであった。だが、カインはアベルを殺し、人類最初の殺人者となり、地上をさまよう者となった。そしてその子らの歩みはいよいよ神から遠ざかっていった。

そこで神はアダムとエバの間に再び男の子を与えたもうた。それがセトであり、セトの子がエノシュである。エノシュという言葉は壊れやすいもの、はかないものを意味していた。そりは人間が弱く、壊れやすいものであることを現わしているとともに、エノシュが真に人間の弱さを自覚していることを現わしていたのであろう。それゆえエノシュは神を呼び求めたのである。

このアダムとエノシュの二人の伝説の中に、私たちは神の人間に対する摂理と配慮の長い歴史の予徴をみることができるように思う。神の深い恵みによって人間が造られ、恵みの中に置かれていた歴史、人間がその恵みになれ、神に背き、神から離れていった歴史、そして人間がその弱さに目覚めたとき、初めて神を呼び求めるに至った歴史ーその長く、重い歴史を思わざるを得なかった。

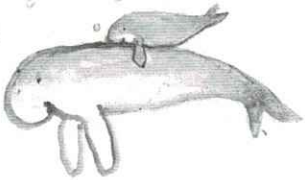
旧約の詩人は、無限の大空に対し、月と星を仰いだとき、深い感動をもって、このアダムとエノシュに象徴される人間の長く、重い歴史を思わざるをえなかった。

江口　武憲・執筆（当時・日本福音ルーテル小岩教会牧師）
1974年『キリスト教保育』誌７月号より

新共同訳では詩編8: 4～7です。一部省略、要約してあります。また、８月号でも続きの説明をします。

キリスト教保育

第676号7月号



年主題

ともに

幼子とともにキリストへ　2
目次　3
〈巻頭言〉記憶の中から　貴田和子　4
〈論説〉子どもを理解すること(2)　子どもと対話する　榎沢良彦　6
〈小論〉子どもを亡くした家族への支援と理解(2)　吉田静　14
図書紹介　渡部裕紀　横山牧人　19
聖書にきく・お話　黒米理恵　20
子どもと賛美するために　23

【カリキュラム】
7月　月のねがい表　25
心にとめて　金澤直子　26
実践報告　認定こども園しののめ　28
実践からの学び　海野美代子　34
子どもの祈り　35
心にとめて　小出馨　36
実践報告　名寄幼稚園　38
実践からの学び　井出孝太郎　43

〈連載〉私たちのキリスト教保育　高梨美紀　44
〈連載〉せんせいのお話ききたいな　菊野秀樹　48
絵本のとびら　永瀬真澄　51
私たちの園では　松村幹子　52
目福口福耳福　中村福助　55
礼拝のお話　赤木敏之　57
風　清水美穂　編集子　東義也　67
連盟だより　68

カット　中畝治子　金井ユリ　藤安初枝　小鯛みのり
松成真理子　菰田とみ子　中川晶子　表紙絵　田中槙子